
ラスナ王国物語 月神に選ばれし姫

ゆうか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスナ王国物語 月神に選ばれし姫

【Nコード】

N3970E

【作者名】

ゆうか

【あらすじ】

　　ビイ大陸の東の小国『ラスナ王国』ラスナ王国の心“歌姫”権力無き“王子”大国と隣国の戦いで開戦の危機を迎えたラスナ王国で二人はなにを選ぶ？

プロローグ・1

ここは動物の住む国『ビージュ』
ビージュの広場では、さまざまな動物が皆、ひとつの大きな輪をつくり静まりかえっていました。

動物の輪の中には、白く小さな鳥がいました。
名は、『コトリ』

コトリの職業は“イセカイ”を旅して、ビージュに住む動物たちに“イセカイ”の事を物語ることでした。

つまり“カタリベ”

コトリはさきほど“イセカイ”から帰ってきて“カタリベ”をす
る、と聞いていました。

だから、皆静かにしているのです。

コトリはゆっくと口を開きました。

みなさま、ごきげんうるわしゅう……

わたしは“イセカイ”から帰ってきました。

さあ、今回も語りましょう。

みなさま、どこの話がよろしいですか？

コトリは皆に問いかけました。

すると、みんな異口同音に言いました。

『ラスナ王国』

プロローグ・2

バクは、昔から人間に

『悪い夢をたべてくれる動物』

と言われていました。

その言葉通りバクは、悪い夢を食べます。

バクは、人間の悪い夢をたべ、未来を夢で視ます。

だから、バクの職業は『夢見師』といわれます。

そんなバクは最近、夢を視ました。

人間のたくさんある国の中でも、小さな、小さなラスナ王国の
滅びる夢を………

みんなは知りたがっていました。

バクが夢を視間違える事はないけれど………

ラスナ王国は なんて 滅びるの?????

コトリは少しだけ目を閉じました。

コトリは目を開きました。

コトリの目の前には、コトリの語りを待つ動物がいます。

それも、たくさん………

コトリは語ることにしました。

ラスナ王国

この国は数ある人間の国の中でも、小さな、小さな国です。

そんなラスナ王国には、国の心とも、象徴ともいえる者がいます。
す。

その者は、普段はこうよばれています。

『歌姫』と・・・・・・・・

「歌姫ってナニするのー？」

小鹿のカノウがコトリに聞きました。

コトリは歌うように答えました。

ごぞんじのとおり、ラスナ王国は建国守護神の月のデイジユ神を定めています。デイジユ神は歌が好きで、天へ帰る時、ラスナ王国の守護の要を歌にしたほどでした。

『この国に歌、続けば永遠なり』

だから、ラスナ王国では何十年かに一度、歌の徴をもつ者が生まれるのです。

歌の徴―《黒い円（新月）に涙のような痣》右腕の二の腕にもつから、歌姫

歌姫は月に一度、新月の夜に歌うのです。

月が隠れて、ラスナ王国の場所がわからないデイジユ神に

『ここです ラスナ王国はここです』

とラスナ王国の場所を歌うのです。

さて、ラスナ王国滅亡時の歌姫はまだまだ若い少女でした。

少女の名はヘキといました・・・・・・・・

1、<ホシノミヤ>の玄関で・・・

ラスナ（良砂）王国、王都ゲツルイ（月涙）の南西に位置するデ
イジュ神の神殿<ホシノミヤ（星ノ宮）>

そこには、歌姫が住んでいました。歌姫はそこで歌をうたい、デ
イジュ神に祈るのです。

歌のレッスンの時間になりました。時間になったので歌姫は・・・
・・・きませんでした。

そこで、歌姫のお世話係であるミーサは、<ホシノミヤ>の庭で、
<ホシノミヤ>の廊下で叫ぶのです。

「歌姫さまあ~~~~~っ!!! どこにいるのですかあ~~~~~
~~~~?」

でてきてくださ~~~~~いっ!!!」

<ホシノミヤ>の正面玄関に彼は立っていました。

ライトブルー  
茶色い髪ブラウンに、森林を思わせる深い緑色の瞳。

「そろそろかな・・・」

ほんの少し経って、<ホシノミヤ>から一人の少女が出てきまし  
た。

少女は月の光のように淡い金色の髪に、青と翠の中間色の瞳をも  
っていました。

少女は彼を見ると嬉しそうに彼の方へかけてきました。

それを、見ると彼は小さくため息をつくと両腕を広げました。

ポスッ

少女は彼に抱きつくにつこりと笑いました。

「久しぶり、お兄さま」

ギリギリのところまでふんばって少女を抱きとめた彼はビミョーな顔をしていました。

「歌姫サマはまたレッスンをサボったのか……?」

「“歌姫”なんていわないでっ!ちゃんと名前で呼んで、お兄さま」

「はいはい、わかったよ。へキ」

そう、少女は現在歌のレッスンから逃亡中の“歌姫”へキ(碧)でした。

「お兄さま、今日は何処へ行くのですか?」

「それよりもさ、いいかげん、離れよーね、へキ」

へキは“お兄さま”にグイグイと体を離されました。

へキは“お兄さま”をうらめしそうに見ました。

「リヨクはヒドイ……」

その言葉を聞いた瞬間“お兄さま”は、あちこちをキョロキョロと見回し(軽く)へキをにらみました。

「へキ……. ゆーなよ俺の名前、バレたらどうするんだ?」

ラスナ王国では、人名に“色”をつける事を禁じていました。

その理由は王族と王族に近い大貴族だけが使えるようにしたかったから…….

へキは、元々大貴族出身なので、名に色をつかえました。

では、へキが“お兄さま”と呼んで慕う少年の正体は…….?

ラスナ王国の第二王子リヨク(緑)でした。



## 2、王家（前書き）

投稿が遅れてすみません……

ほぼ、一ヶ月ぶりです……。

今月ががんばりたいと思います！

## 2、王家

ラスナ王国の現国王ハクア（白亜）には、二人の妃がいました。

一人目は、第一妃レイヴィアさま。

二人目は、第二妃シロガネさま。

第一妃のレイヴィアさまは隣国ヨウレイ（耀麗）国の元第一王女で、国どうしのつながりをつよめるためにラスナ王国に嫁いできた生まれも育ちも王女様。とても綺麗で、性格もおだやかで、ハクア王に愛されていました。

そんなレイヴィアさまとハクア王は、仲が良く二人の王子と一人の王子をおつくりになっていました。

第一王子 コウロ（紅榴） 王太子 王位継承権第一位

第三王子 セイクウ（青空） 王位継承権第三位

第一王女 コハク（琥珀） 王位継承権第四位

それは、まだレイヴィアさまのお腹にコウロ王子さまがいると、わかっていなかったときの話です。

レイヴィアさまがハクア王に嫁いで二年……

二年も経ったというのに、レイヴィアさまとハクア王の間には、子がいませんでした。王宮の人々は困りました。ハクア王にはご兄弟がいなく、もしハクア王が退位されたら、お世継ぎがいまいませんでしたから……。

そこで、ラスナ王国の大貴族サイカ（彩夏）家の姫シロガネさまが、ハクア王に第二妃として嫁ぎました。

シロガネさまがハクア王に嫁ついでから、一年後、レイヴィアさまはコウロ王子を懐妊、無事出産しました。それと同時期に、サイ

力家は失脚しました。

国民はコウロ王子の誕生を祝いました。

コウロ王子が二歳になった頃、今度はシロガネさまが懐妊、出産しました。

生まれた子は男の子で、瞳の色にちなんでリヨク（緑）と名づけられました。

リヨク王子が産まれると、ハクア王はコウロ王子を王太子にしました。名目じようは、国が疲弊するお世継ぎ争いをなくすため、でした。が、ハクア王はコウロ王子を王太子にするとリヨク王子にあわなくなりしました。家の後ろ盾も、王の寵愛もないシロガネさまは、後宮からでなくなりしました。

その後、レイヴィアさまは一人の王子と一人の王女をお産みになりました。

そして、弟や妹も与えられている領地も、リヨク王子はあたえられませんでした。

宮廷人はあだ名しました。

『権力無き“王子”』と……。

味方も、領地も無い、リヨクの心は荒み、冷たくなりました。そんな、リヨクを救ったのはへきでした。

二人が出会ったのは十二年前の王城の庭でした。

初めて会ったのにもかかわらず、へきはリヨクに言いました。

『おにいちゃん、あそぼ！』と……。

最初はナゼ『権力無き“王子”』と遊びたがるのだろうか？と不思議に思ったりリヨクでしたが、あそんでるうちにへきが楽しそうにしているのを見ると考えるのをやめました。

それから、リヨクはへきが歌姫であることを知って……兄妹のように仲良くなり、リヨクはへきに救われました。

## 2、王家（後書き）

自分で書いていてよくわかんなくなってきた所です。

覚えててほしいのは……

・コウロ、セイクウ、コハクは第一妃の子

・リョクは第二妃の子で、冷遇されている

ということですよ。

### 3、色つき眼鏡

「うう~~~~」

へキは拗ねたようにうなりました。リヨクはそんなへキをスルーしてしまいました。

「あー、忘れる所だった」

リヨクはポケットから眼鏡を出しました。

眼鏡は青くて薄いレンズに、銀縁。度は入っていません。

「ちゃんとかけておけよ、へキ」

そういうとリヨクはへキに眼鏡をかけました。

ラスナ王国の国民は、普通は茶髪茶瞳でしたが、最近は近隣諸国との国交が盛んになり様々な色の髪、瞳を持つ人が増えました。さすがにへキのように、いくつもの色が混じったような色の瞳を持つ人はあまりいませんでした。(ちなみに、金髪に翠瞳・青瞳をもつのは主にシュルドスタ王国の国民です。)

『あまりいいい!!目立つ!!』

という事で、リヨクは外出時にはへキの瞳の色でへキが歌姫だという事がバレな色つきで度無し眼鏡をへキにかけさせていました。

「うう~~~~」

へキはまたうなりました。

いくら目立たないようにするとはいえ、色つき眼鏡をかけるのは嫌なのです。

(だって……お兄さまの顔が眼鏡越したと青がかかって見えるんだもん)

「『うう~~~~』じゃなくて、言うのも、はずすのも、ダメだぞ。いいな?」

「わかりましたあ〜〜……………」

拗ねたようにそっぽを向くへキを見て、リヨクは苦笑しました。

(しょうがないなあ……………)

「へキ、へーキっ！リシャおばさんのレモン・シャーベットを食べに行かないか？」

リシャおばさんのレモン・シャーベットはゲツルイの噴水広場のそばにあるシャーベット屋さんでした。ちなみに…レモン・シャーベットはへキの好物でした。

へキは拗ねた瞳をして、むくれていました。

「どうしてもっていうなら……………」

微妙にへキは意地っ張りでした。そんなへキの性格を知っているリヨクは、気にせずに言いました。

「じゃ、行くぞ」

リヨクはへキの白い腕をつかむと、リシャおばさんの店の方向へ向きました。

「いざ、レモン・シャーベット！！」

そういつて右手でこぶしを作って、天に向かって突き上げました。

へキは顔を赤らめました。

なぜって？

いきなり叫んでこぶしを突き上げたリヨクは、めっちゃめっちゃ目立ってて、しかも周りの人の目を引きまくっていましたから。

「？ 何で顔を赤らめているの？へキ」

リヨクは、自分が目立っているのを知らないのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3970e/>

---

ラスナ王国物語 月神に選ばれし姫

2010年10月20日13時36分発行